岩田真美・中西直樹編著
『仏教婦人雑誌の創刊』

法藏館　二〇一九年二月刊
A5判　x＋三二九頁　六〇〇〇円＋税

星野靖二

本書は、仏教婦人雑誌を手がかりとして、草創期の、すなわち一八八〇年代から九〇年代にかけての仏教婦人会とその活動について検討しようとするものである。本書の冒頭において、共編者である岩田真美は「婦人」信者の組織化はどのように始まり、そこにはいかなる意味があったのか。また、当時の仏教者たちは女性をどのような存在として捉え、どのように伝道教化を行っていたのか」という問いを掲げ、またこれらを論じることによって「近代の「女性と仏教」研究の進展を目指したい」と述べている（ii頁）。

本書が編まれた背景について述べておくと、二〇一六～二〇一七年度にかけて、共編者である中西直樹を研究代表者として、龍谷大学仏教文化研究所において共同研究プロジェクト「仏教婦人会の研究」が行われた。本書はその直接の成果となる。また本書は、二〇一八年に刊行された『『反省会雑誌』とその周辺』を第一巻とする「シリーズ近代日本の仏教ジャーナリズム」の第二巻として刊行された。まず、以下に目次を掲げる。

はじめに　岩田真美
第一部　解説論文
第一章　近代仏教婦人会の興起とその歴史的意義　中西直樹
一　仏教婦人会興起をめぐる時代状況
二　キリスト教の教勢拡大と仏教側の対応
三　仏教結社の活発化とその規制
四　『奇日新報』創刊と女性教化論の興起
五　『婦人教会雑誌』創刊とその論調
六　初期仏教婦人会の性質
第二章　東京貴婦人会から婦人法話会へ　碧海寿広
一　二つの婦人法話会
二　「貴婦人」のための仏教
三　東西両派の共通認識
四　「貴賤」を問わない「婦人」教化へ
五　改組の帰結
第三章　京都における真宗婦人諸団体の動向
——令徳会（『婦人世界』）の前夜から　吉岡諒
一　研究の課題
二　令徳会の発会前夜——京都真宗系女学校の誕生と展開
三　令徳会の発会以後
四　結論
第四章　近代大阪における仏教と女子教育
——相愛女学校設立をめぐって　近藤俊太郎
一　本章の視角
二　大阪の婦人と教育

三　相愛女学校の設立
四　相愛女学校の設立主体
五　相愛女学校の女性像
六　大阪の真宗と実業界
第五章　上毛婦人教育会と『婦人教育雑誌』
——群馬を中心とした仏教婦人会の動向　岩田真美
一　仏教婦人雑誌の誕生
二　小野島行薫と酬恩社
三　婦人仏教徒の模範としての「妙好人」揖取寿子
四　清揚女学校の創設
五　上毛婦人教育会と『婦人教育雑誌』
六　「家庭」論と仏教婦人会の形成
第二部　各誌総目次　吉岡諒
第三部　関係復刻資料　中西直樹

概要としては、第一部にプロジェクトの共同研究者たちの手になる解説論文を収め、第二部にプロジェクトによる蒐集・整理を受けて製作された雑誌一〇誌の目次を掲げ、第三部に関係資料を復刻して掲載するという構成である。

なお、頁数の配分は第一部（三—九四頁）、第二部（九五—二二六頁）、第三部（二二七—三二五頁）となっている。書評としてはどうしても第一部に焦点を合わせることになるが、第二部・第三部がかなりの割合を占めていることを先に述べておく。

第一部の「解説論文」として、五本の論文が寄せられている。第一章「近代仏教婦人会の興起とその歴史的意義」（中西直樹）は、本書が焦点を合わせるところの「近代仏教婦人会」について、成立当時の時代状況やその意義を概観している。

中西は、一八八〇年代末に仏教婦人会を含む各種仏教教化団体（例えば仏教青年会、仏教少年協会など）が設立されたことを指摘した上で、そこに同時代におけるキリスト教の教勢拡大を目の当たりにして、仏教者たちが脅威を感じていたこと、またそれに対する対抗意識があったことを指摘する。

そのような危機感は、例えば少し時代を遡って一八七六年に小野島行薫（浄土真宗本願寺派僧侶。第五章でも言及される）によって設立された酬恩社のように、その活動を全国規模に展開させていく仏教結社の組織・活動につながる面があったが、しかしそれらの巨大結社の企図していた方向性と本山側の思惑が必ずしも一致していたわけでもなかった。例えば本願寺派の本山側は、一八八三年に施行された教会結社条例などにおいて全国規模の結社を解体して統制を強化し、結果として少年教会・青年会・婦人会など対象によって分けられた各種の教化団体を、地域別に組織する方向性が定まっていったと中西は論じている。

そうした状況において、例えば本願寺派系の新聞『奇日新報』（一八八三年創刊）上で、編集者の一人である水渓智応は女性教化・女子教育について論じており、更に水渓は、一八八八年に仏教系の婦人月刊誌の先駆的存在となる『婦人教会雑誌』を東京で創刊することになる。

同誌創刊後、宗派を問わず各地で仏教婦人会が組織されるよ

うになり、雑誌の発行や女学校の設立・運営が行われることがあった（例えば第三章では、『婦人教会雑誌』の発行母体である東京の婦人会の京都進出が論じられている）。中西はこの二点、つまり印刷メディアと女子教育を近代の仏教婦人教会の決定的な特徴であるとするが、しかしそこで掲げられた女性像は、欧化主義への反動として出てきた国粋主義に迎合する面があり、伝統的な女性のあり方を克服するようなものにはならなかったとも評している。

第二章「東京貴婦人会から婦人法話会へ」（碧海寿広）は、東京で設立された真宗大谷派の仏教婦人会に焦点を合わせ、その性格の変遷などについて論じた小論である。

一八八六年、東京の浅草本願寺別院で「貴婦人会」という仏教婦人会が設立された。同会は、その名称が示すように、明確に華族や富裕層の子女を教化対象として組織されたものであり、同様の会が全国各地に設立されていくことになるが、そこには当時、主としてキリスト教系の団体がそうした子女たちの受け皿となっていたことに対する対抗意識があったという。一八八八年には本願寺派の婦人教会のモデルとなったとされる令女教会が設立されているが、そこでもやはり上層階級の子女の取り込みが企図されており、両派に教化をめぐる問題意識が共有されていたと論じられる。

しかし、例えば境野黄洋の『仏教』上の論説に見られるように、一八九〇年代後半には「貴婦人」を特別扱いするような教団の姿勢に批判がなされ、また大谷派の機関誌である『常葉』においても、「貴賤貧富の差別なく」婦人教化を行うべきことが論じられるようになったという。

そのような状況を受けて、同会は一九〇一年に「婦人法話会」へと改称され、機関誌『婦人法話会報』を出すことになる。それは、一方において「貴賤貧富」を問わずに総体としての婦人を教化対象としていく動きではあったが、他方において「貴婦人会」が「貴婦人」（のみ）にある意味で期待し、承認していたところの女性の主体性――もちろんそれは「国体護持」のためのものであった――については、目を向けなくなる動きでもあったと碧海は論じている。

第三章「京都における真宗婦人諸団体の動向――令徳会（『婦人世界』）の前夜から」（吉岡諒）は、一八八〇年代の京都における真宗婦人諸団体の活動を検討する論考である。

京都の真宗婦人諸団体について、従来一八八九年に令徳会が設立され、同年に機関誌『婦人世界』を創刊したことが注目されてきたが、しかし吉岡は、それに先行して一八八一年に同盟社が発足し、一八八〇年代後半には順承女学会という女学校を運営していたことに触れ、京都における真宗婦人諸団体の活動については、令徳会の前史から検討する必要があると指摘する。

京都においては、同志社英学校が一八七五年に設立されて以来、目に見える形でキリスト教の教育が行われていたことになるが、これに対する仏教者たちの危機感は様々な形で表明されていたものの、本山側がこれに対して何か具体的な対抗策を打ち出すことはなかった。そうした中、同盟社を母体として一八八七年に順承女学会が設立されるが（翌年関西女学会に改称）、

その背景には佐竹潭瑞という僧侶の私的な尽力があり、必ずしも本山側が動いたわけではなかったという。これが一八八九年に更に文学寮附属女学会と改称され、必ずしも大規模なものではなかったにせよ、本山の事業の中に組み込まれることになる。更に吉岡は、令徳会とその機関誌の発行は、文学寮附属女学会の開校後に行われたものであり、本山が了解していた事業であるとした上で、『婦人世界』の内容について、「復古的女性像の再建」（四四頁）を訴えるものであると概観している。

こうした令徳会の活動が、その後規模を拡大していくことはなかったが、他方で一八八八年に東京で設立された婦人会は、その機関誌『婦人教会雑誌』（第一章で言及されている）の刊行などを通じて活発な活動を行っており、一八九〇年には「東京連合京都婦人教会」を京都に発足させて、京都進出を試みた。同教会は、東西両本願寺と下京区長の後ろ盾を得て活動を展開させ、やがて京都における真宗の仏教婦人会の活動の中心は、令徳会ではなく東京連合京都婦人教会が担うようになっていったとされる。吉岡は、結局のところ令徳会には「本山関係者とのつながりの弱さ」（五〇頁）という問題があったと述べている。

第四章「近代大阪における仏教と女子教育――相愛女学校設立をめぐって」（近藤俊太郎）は、一八八八年に大阪に設立された相愛女学校に特に焦点を合わせ、当時の大阪における仏教女子教育のあり方を照らし返して検討している。

大阪では、一八七〇年代半ば以降、例えば「エディの学校」（設立一八七五年。現、平安女学院（京都））や永生女学校（設立一八七九年。現、プール学院）などのキリスト教系の女学校が設立されて女子教育を推進しており、これは川口に外国人居留地があったことと関係していた。これに対して近藤は、この外国人居留地から津村別院（本願寺派）まで、直線距離にして約二キロメートル弱と極めて近い位置にあったことに触れ、こうした地理的条件を受けて、津村別院とその門徒の商人たちにおいては、キリスト教への対抗意識がより切実なものとしてあった可能性を指摘する。

実際に、相愛女学校が設立（一八八八年）された際に、校舎は津村別院の一間が用いられ、また同校の発起員には大阪の本願寺派寺院の住職たちと、有力門徒であった大阪の実業家たちが名前を連ねていた。折しも一八八〇年代後半の大阪では、欧化主義に対する国粋主義の揺り戻しという時代状況もあり、外国商人の優位な立場に対して民間商人から商権回復運動が行われていた。これらを受けて近藤は、「川口外国人居留地と外国商人とキリスト教というトライアングルに、大阪市西区から津村別院周辺までの地域と大阪実業界と仏教（真宗）という対抗軸」（七〇頁）の存在を示唆している。

このように近藤は、相愛女学校設立の背景に真宗と実業界との結び付きがあったことを地域的特性として述べた上で――大阪の本願寺派婦人会が、他地域のそれに比べて強い経済的基盤を有していたことも指摘されている（六三頁）――その「仏教」女子教育の内実の検討を、更なる史料発掘と合わせて進めていくことを、今後の課題として挙げている。

第五章「上毛婦人教育会と『婦人教育雑誌』――群馬を中心

とした仏教婦人会の動向」（岩田真美）は、一章でも言及された小野島行薫の教化活動について目配りしながら、その上で一八八七年に群馬で発足した上毛婦人教育会とその機関誌である『婦人教育雑誌』について考察を加えている。

周防出身の本願寺派僧侶である小野島行薫は、本山から関東布教のために群馬県に派遣され、一八七六年に仏教結社「酬恩社」を創設した。小野島の関東派遣の背景には、同郷で篤信の信者であった楫取寿子（吉田松陰の妹。群馬県初代県令、楫取素彦の妻）が本山に派遣を要請したということがあったという。

寿子は一八八一年に病没するが、その遺書が没後に編纂された妙好人伝に掲載され、そこでは「男女分業論的な視点から真宗の真俗二諦説が論じられている」（八三頁）と岩田は指摘している。

小野島の群馬での活動について、自ら発起人の一人となって一八八七年に前橋に清揚女学校を創設し、その際に上毛婦人教育会を組織している。結果として清揚女学校は三年後に閉校となるが、上毛婦人教育会の機関誌として一八八八年五月に創刊された『婦人教育雑誌』は、一一月には発行所を東京に移し、一八八九年までは刊行されていたようである。東京移転後の同誌からは、各地の仏教婦人会と連携を深めていたこと、また国粋主義的な思想の影響があったことなどが窺われると岩田は論じている。

なお、群馬固有の状況として、新島襄が出身地である上州安中でも伝道活動を行っていたことなどからキリスト教徒の活発な活動が見られており、一八八七年に県内の諸キリスト教婦人会を集結させた会合が開催されたように、婦人を対象とした伝道活動と組織化が進められていたということがあった。一八八八年には前橋英和女学校（現、共愛学園）というキリスト教主義の女学校が設立され、これが前述の清揚女学校と競合し、あるいはその閉校の一因となった可能性を岩田は述べている。

これらを受けて岩田は、関東の仏教婦人会の動向が雑誌メディアを通して発信され、各地に広がっていたことを指摘した上で、同時にそうした婦人教化をめぐる動きが、本山主導というよりはしばしば「キリスト教の教勢拡大に危機感を抱いた一部の真宗僧や結社の連携により推し進められたものであった」（九〇頁）と論じている。

第二部「各誌総目次」では、『婦人教会雑誌』、『婦人教育雑誌』、『婦人世界』、『北陸婦人教会雑誌』、『道之友』、『心の鏡』、『姫路城北女教会雑誌』、『をしへ草（姫路女教会々誌）』、『智慧之光』、『防長婦人相愛会誌』の一〇誌の目次が掲載されている。労作であり、今後の更なる研究に有益なものであることは疑いがないが、欠号がある雑誌も多いため、収録している号数の一覧をわかりやすく示していても良かったように思われる。

また、一部の雑誌については調べても所蔵情報が不明なものがある。おそらくは本書の母体となったプロジェクトで蒐集した資料であると思われるが、本目次を見て原資料を確認したいと思った読者に対して、その方法なり連絡先なりを示していれば、より良かったのではないだろうか。更に、蛇足として付け加えておくと、電子化された誌面は難しいとしても、こうした

目次情報などは、やはり検索可能な情報としてインターネット上に公開することで、より活用されるのではないかと考える。

第三部「関係復刻資料」では、「史料的価値が高く一般に閲覧が困難と考えられる」（二二八頁）資料として、（一）大谷派系の仏教婦人雑誌である『心の鏡』第一号（一八九〇年）、（二）『相愛女学校規則』『相愛女学校設置方法書』（一八八八年）、（三）『京都婦人教会規約』（一八九二年）が復刻されて収録されている。収録された資料について、冒頭に簡単な解説が付されており、そこで（一）は碧海論文、（二）は近藤論文、（三）は吉岡論文とそれぞれ関係していると述べられているが、内容についての検討は今後の課題として残されているという印象を受けた。

以上、本書の内容を概観した。第一部第一章において、近代の仏教婦人教会の特徴として印刷メディアの活用と女子教育の推進という二点が挙げられていたが、いずれもこれまで必ずしも十分に研究がなされてきていない領域である。本書は実際に資料を蒐集した上で、これらについて検討した成果であり、この分野の研究に先鞭を付けたという意義があることを特筆しておきたい。

ただし、それはまたこの分野の研究が発展途上であり、今後更なる展開が見込まれるということでもある。その意味で、本書は到達点というよりも、中間報告として読まれるべきであろう。

本書中でも、近藤俊太郎はこの領域における現状での研究課題として三点を示唆している（第一部第四章）。近藤は、先行研究を概観した上で、それらにおいて近代日本における仏教女子教育は、仏教の本来的立場から逸脱して、結果として天皇制国家を支えてしまったという語りが見られることがあると指摘した上で、しかし当事者たちがそこで何を「仏教」として教育の場に落とし込んでいたのかは別に検討されるべきであるとし、近代日本の「仏教女子教育」における「仏教」の内実について検討することを第一の課題として挙げている。第二の課題として、天皇制国家と仏教界の関係についても、前者による後者の抑圧という一方向的な枠組のみにおいて捉えるのではなく、「仏教界からの自発性」を視野に入れた双方向的な「絡まり合い」（五九頁）において検討すべきことを述べ、その上で、事例の検討において地域的特性に目を向けるべきことを指摘して、これを第三の課題としている（五八―五九頁）。

近藤自身も述べているように、本書は第三の論点については一定の成果を示しているが、第一・第二の論点については必ずしも十分に掘り下げられているわけではない。もちろんそこには資料的な制約という問題があるとしても、「仏教女子教育」における思想的な側面、あるいはそこで「仏教」がどのようなものとして捉えられ、また教育されていたのかといったことについて、今後更なる研究が期待される。

更に言えば、そこで「仏教」の同時代的な独自性・非独自性を検討するためには、女性史研究やキリスト教系の女子教育の研究など、他の「仏教」ではないものとの比較が必要となるように思われる。例えば、本書で検討されている事例の多くについて、その背景に仏教者たちのキリスト教への対抗意識があっ

たことが指摘されているが、キリスト教と関わって行われた出版や教育と、仏教と関わって行われたそれらとの比較検討は、本書以後の検討課題として残されている。また、近藤は地域的特性を検討する必要を指摘したが、キリスト教についても、大文字のキリスト教ではない個別の地域的な実践についての研究が積み重ねられてきている。両者を比較していくことで、より豊かな展開が見込まれるのではないだろうか。

別の視点から見るならば、冒頭で岩田が述べた「近代の「女性と仏教」研究の進展」のためには、前近代における「女性と仏教」を参照する必要もあるように思われる。本文中でも「坊守講」「女人講」「寄講」「女房講」といった各種の講が、近代の仏教婦人会に何らか接続していたように述べられている。その変遷についても見ることで、現代の問題まで射程を伸ばすことができるのではないか、と今後の研究に期待して述べておきたい。